

斯く依し奉りし国中に、荒ぶる神等をば、神間はしに問はし賜ひ、
 神佛ひに佛ひて賜ひて、言問ひし磐根樹根立、草の片葉をも言止めて、
 天の磐座放ち、天の八重雲を嚴の千別きに千別きて、天降し依し奉り
 き。

邇々芸命と呼ばれる聖の集団の所謂天孫降臨が何時頃の事であったのか、ははっきりとは分かっていません。多分、数千年乃至一万年位前の事と推定されます。また、この集団が自覚・保持して日本国肇国の精神の基礎となった布斗麻邇言霊学は何時その確立に成功したか、これもはっきりとは分かりませんが、天孫降臨以前、数千年の永い間の研究により降臨の時より前に完成された事は事実でありましょう。

では、言霊布斗麻邇の学を自覚・保持した聖の集団が高天原と呼ばれる地球の高原地帯から、政治を行うのに適した平地に降って来る以前の日本や世界の状況はどうだったのでしょうか。人類が「人の心とは何か」の究極の答えを出したのが言霊の学の完成でありますから、それ以前の人間社会の状況は決して平和豊潤なものではなかった事が推測されます。古事記はこの様子を「豊葦原の千秋の長五百秋の水穂の国は、いたくさやぎてありけり」と表現しています。人間の欲望と感情の赴くままの生活、または、力の強い者が力により統率する社会が展開していたものと推察されます。または高天原に於て布斗麻邇の原理が完成される以前の、不完全な生命理論を持って降って行った人たちの統率する矛盾に満ちた社会が存在したのでありましょう。「人間とは何か」の解明された真理を保持した集団の降臨があつて、人類ははじめて人類文明創造という意図を持った歴史の第一歩を踏み出す事が出来たと言えるのでありましょう。

「斯く依し奉りし国中に、荒ぶる神等をば、神間はしに問はし賜ひ、
 神佛ひに佛ひて賜ひて」

神漏岐・神漏美である言霊原理の完成・自覚者が、皇孫邇々芸命と呼ばれる聖の集団に安らかな良き国を建てよと委任した国土の中には、荒ぶる神の行いをする人達が満ちていました。荒ぶる、の語源はアラの音図で示される思想を運用・活用するという事です。言霊学上、言霊ウである五官感覚に基づく欲望性能を人間の五種の性能の中心に置

いた心の構造を示す五十音言霊図を天津金木音図といいます。(図参照) この音図で示される思想の内容が上段のアからラまでの展開で表わされる事からアラ(荒)の音図と呼ばれます。また、「ふる」とは運用・活用するの意でありますので、この性能を中心に置いた行為を身上とする思想の持主を「荒ぶる神」と言うのであります。即ち自らの持つ腕力、武力、金力、権力等を自負して社会の生存競争を勝ち抜いて行おうとする思想・主義の持主のことであります。古事記の神話で言うならば、天孫降臨以前にこの国を治めていた須佐之男命の霊統をひく大国主神、事代主神、建御名方神等の神々を指します。

降臨した聖の集団は、従来そこにいた所謂荒ぶる神達と戦争をしたものではありません。荒ぶる神の生存競争の権力闘争思想と、聖の集団の自覚する生命本然の精神構造に根ざした言霊布斗麻邇の原理による政治と、どちらが人間の住む社会を統治する方法として適当であるか、をお互いに討議したのであります。この作業を古事記は「言^{こと}向^むけ」と呼んでいます。「神問はしに問はし賜ひ、神佛ひに佛ひて賜ひて」とは以上のような討論があり、その結果、権力闘争思想より生命本具の原理である言霊の原理の方が、民衆の統治の手段として比較にならぬ程合理的である事を在来の荒ぶる神達が認め、統治の実権を降臨の聖の集団に明渡したという事になります。この統治の実権の譲渡を古事記は「国^{くに}譲^{ゆず}り」といいます。

「言問ひし^{いわね}磐根樹根立^{きねたち}」の「言問ひし」とは先に述べた討論を仕掛けた事を言います。天孫の側から仕掛けたのか、荒ぶる神からかはどちらとも取れますが、結果としてお互いの討議となった事に変わりありません。「磐根^{いはね}」とは昔の東洋思想の五行・五大の思想のことです。磐根は五葉音に通じます。人間本具の心の構造の要素の中で、言霊学で謂うなら大自然である五母音宇宙のみに拘泥して、文明創造に関しての人間の主体の智慧を示す八つの父韻については言及することが少ない思考・主義のことであります。「樹根^{きね}」の樹は気で感情論の事と受取られます。天孫降臨以前に行われていた土着信仰に根ざしたものの考え方の事でありましょう。「磐根樹根立」の「立」は断ちの謎です。その時以前に各地各所で実際に行われていた五行思想や感情

天津金木音図

ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ
ヰ							イ
ウ							ウ
エ							エ
ヲ							オ

論・信仰思想等を、討議の末に、それ等は生命の本義に沿わない不完全な考え方だ、と否定して、それ等の実行実践を了解の上で廃止し、世の中から一掃したことであります。

「草の片葉をも言止めて」の「草」は「種々」の意。「片葉」は「書いた言葉」という事。言霊原理に基づいて作られた神代神名文字でない概念的思考の文字の事です。また延いては、それ等の文字で綴られた種々の思想の書物でありましょう。それらの言葉、文字、思想の一切を人間社会から一掃し、使用を停止させたのでした。(註一)。かくて旧約聖書にある如く、「全地は一つの言葉、一つの音のみなりき」(創世記)の精神生命の原理の言葉で統一された世界が誕生したのであります。

「天の磐座放ち」の磐座は五十葉倉の意で、五十音言霊を組織して入れた倉、即ち言霊原理の事となります。天の磐座とありますので、原理の中の天津磐境である言霊で構成された精神の先天構造の原理であるとも取れます。「放ち」とは世の中に向って発表し、流布したの意。そこで「天の磐座放ち」とは「弱肉強食の混乱した生存競争社会の中に向って、人間生命本具の言霊によって構成された精神の先天構造の原理を開示・発表して、社会統一の政治の光を掲げた」の意となります。

「天の八重雲を嚴の千別きに千別きて、天降り依し奉りき。」の「天の八重雲」とは「先天構造の中の八段に重なった雲」の意。雲とは天空にむくむく湧き出るもの、の意で人間天与の根本智性のリズム、即ち八つの父韻、または父韻の働きによって生まれる三十二の子音の並びの事であり(図参照)。「嚴の」とは「清浄な」または「おごそかで権威のある」の意です。「千別き」とは「道別き」の意で、利害、真偽、美醜、善悪または当・不当をはっきり区別することです。天孫降臨以前の日本や世界の生存競争社会にも種々のルールがあった事でしょう。このような弱肉強食の社会のルールを言霊を以って表示すると金木音図となります。その父韻の並びはキシチニヒミイリとなります。現在学校で使われている五十音図であります。この精神構造は天孫降臨以前の大国主命の社会と同じであり、この社会制度の原理を出

【註一】 かく言うと、現代の読者は、極めて強制的に、また強権的な言語、文字、思想の統制と受け取られるかも知れません。けれど決してそうではありません。各地域、民族の言語・思想の内容の特徴を見極め、それを摂取して、更に大きな合理的な文化の担い手である言語ないし文明の中に了解の下に統合して行くならば、何の抵抗もなく受け入れられるでありましょう。または、「一つの言葉、一つの音」とは、各地の言語はそのままに、麻邇の言葉、文字を公式の用にのみ限定して世界の正式の言語として制定した、とも考えられます。

雲八重垣（古事記）と呼びます（図参照）。「嚴の千別きに千別きて」とは前の出雲八重垣の原理で治められている世の中に、天の八重雲の生命本来の調和をもたらす統治の方法を投入して、その善悪・当否を次々と立て別けて行く事であります。弱肉強食の暗黒の社会に、光明輝く天の八重雲の叡智の統治の光が投入されるならば、暗黒は瞬時にして消滅の運命をたどることとなります。この手順を「嚴の千別き」といいます。

人間の長い歴史創造の過程で、人類の生命を脅かす世の中が現出した時、それを平安・調和の社会に転換させる方法は常に唯一つしかありません。それが「天の八重雲を嚴の千別きに千別き」する事であります。社会文明創造の精神手順を「チキミヒリニイシ」の時置師の並びに組み替えることであります。この精神操作は大祓祝詞の後章「天津金木を本打ち切り末打ち断ちて…」と大祓祝詞の根本原理として再び同様の事が述べられる事となります。

以上の文章の解説をまとめて書きますと、次ぎの様になります。「以上述べましたように統治の委任されました国土の中で、従来からの統治をしておりました弱肉強食の権力政治を方針としておりました人達に、その様な維持のやり方で今後もやって行っていいのか、と疑問を投げかけ、また間違った方針を討論によって改めさせ、その討論によって従来行われていた自然主義や感情論などの不完全・不合理な主義による政治のやり方を断念させ、またそれぞれの地方の生命の根本法則に基づかない言語や文字や文化をも納得の上で廃止させ、それに代わって人間の精神生命の先天構造に則った言霊布斗麻邇の法則を世の中に発表・開示し、社会の隅々にまで行き渡らせ、布斗麻邇による政治の大方針であるタカマハラナヤサの時置師を適用して、その時までの世の中の混乱の原因となっていた金木思想のカサタナハマヤラの政治の不適当である事を明らかに人々に納得出来るように道理を説くよう、委任された道の実行に取り掛かったのであります。」

大祓祝詞の次の文章に入ります。

天の八重雲

ツ	ト	テ	チ	タ
ク	コ	ケ	キ	カ
ム	モ	メ	ミ	マ
フ	ホ	ヘ	ヒ	ハ
ル	ロ	レ	リ	ラ
ヌ	ノ	ネ	ニ	ナ
ユ	ヨ	エ	イ	ヤ
ス	ソ	セ	シ	サ

出雲八重垣

ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ
リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク
レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ
ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ

斯く依し奉りし四方の国中と、大倭^{おおやまと ひたかみ}日高見国を、安国と定め奉りて、
 下津磐根^{ふとし}に宮柱太敷^{みやしら}き立て、高天原^{たかみま}に千木高知^{ちぎたかち}りて、皇御孫命^{すめみまのみこと}との瑞^{みづ}の
 御殿^{みいどの}へ奉りて、天の御蔭^{あまのみかげ}、日の御蔭^{ひのみかげ}とかく隠りまして、安国と平けく
 知しめさむ。

以上の如く人の心と言葉の究極の真理である五十音言霊布斗麻邇の原理を自覚・保持して、この地球上を生命本具の合理性に叶った、平和な国土とするよう委任を受けた邇々芸命霊知りの集団は、高天原と呼ばれた高原地帯から何処に降りて来たのでしょうか。前にも書きましたように、古事記に「ここは齋肉^{そじし}の韓国^{から}を笠沙^{かささ}之前に^{のみさき}求ぎ^ま通りて…」と書いてある事から、朝鮮半島を通過して九州に来たという事になるであります。その経路については、種々異論のある処でありましようが、聖の集団が「此地^{ここ}は朝日の直刺^{ちかひ}す国、夕日の日照^{ゆふひ}る国なり、かれ此地^{いよ}ぞ甚^よと吉^よき地…」とありますように、世界統治の中心地となる終着点と決定しましたのは、まぎれもなくこの日本列島でありました。以下、大祓の文章を小別けして解釈して参ります。

「斯く依し奉りし四方の国中と、大倭^{おおやまと ひたかみ}日高見国を、安国と定め奉りて」

祝詞の文章はここから新しい章に入ります。今までで、祝詞の序文に続いて第一章の天孫降臨の時の日本と世界の歴史的な状況と降臨する聖の集団との交渉について述べられました。これからは第二章の日本国肇国の目的とその根本原理について述べられることとなります。

「倭^{やまと}」は「大和」とも書きます。平和で合理的な調和がとれている、の意です。「日高見」の日は霊で言霊または言霊原理のこと。「高見」は国家の政治の原則として高く掲げるの意。「大倭日高見国」全体では、生命本具の法則に基づく言霊原理を統治の指標として高く掲げ、世界全体がそれを手本に仰ぎ見る事によって、大調和が保たれている中心となる国、といった意味であります。この事から「四方の国中と」の四方の国とは全世界の国々という事になります。天孫降臨した邇々芸命聖の集団が日本列島を本拠として世界の統治に乗り出し、遂に言霊布斗麻邇の原理に基づいて全世界の平和をもたらし、人類の第一精神文明時代を築き挙げた事を簡単な文章で表現したものであります。

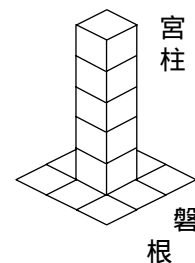
では、その精神文明時代の政治を担当する人の心構えはどんなものであったのでしょうか。それが次に取り上げられます。

「^{ふとし}下津磐根に宮柱太敷き立て、^{すがそ}高天原に千木高知りて」

大自然の生物としての方が生来さすがっている人間性能、即ち生まれたばかりの赤ちゃんの精神性能を表わした五十音言霊図を天津菅麻すがすがといいます。清々しい心の衣という意味であります。この音図の母音の縦の並びは上よりアオウエイとなります。「下津磐根」の「下津」とは、この母音の並びの一番下である言霊イ段となります。このイの段に「磐根」即ち五十葉音の五十音言霊が展開し、存在しています。古代に於ける布斗麻邇の原理による政治の要諦は、先ず「人間とは何か」の最初の認識である人間天与の精神構造を表わす天津菅麻音図の自覚から始まります。

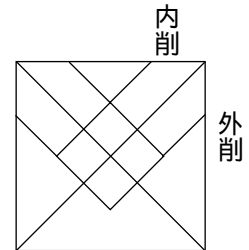
人の心を言霊イの次元で見る時、そこにはアオウエイ五十音言霊が存在するだけで、これより多くも少なくもなく、また、ほかの何者も存在しません。人間の心は五十個の言霊によって構成されます。仏法を求めて旅する三蔵法師の供をする孫悟空は阿弥陀様の掌たなごころに乘せられ、それから外へは行く事ができません。掌とは田の名の心こころ、また田とは五十音図の事であります。それが人間の心の土台です。この土台の上に人間の文明創造の営みが展開されます。

「宮柱太敷き立て」の宮柱とは、神の家みや（御屋）の柱、即ち人間が人間としての自覚の内容を表わす五母音を柱と見立てた事であります（図参照）。人間はこの五母音の柱によって一切の物事を判断することによって生きています。「太敷き立て」の「太」とは布斗麻邇即ち五十音言霊の原理という事。「敷き」は磯城しき（五十城）の意で五十音言霊の事。「宮柱太敷き立て」の全部で「五十個の言霊を土台として、その上に五十音言霊の原理の自覚による人間の判断力を柱として立て」の意味となります。アオウエイの五母音の縦の並びを古神道は天の御柱、伊勢神宮本殿下に建つみはかりばしら「御量柱」と呼んで表徴しています。また神道五部書には「一心の霊台、諸神変通の本基」などと説明しています。人間の自覚された根本的判断力の事であります。



次に「高天原に千木高知りて」であります。「下津磐根」が古代政治の土台認識であり、「高天原に千木高知りて」はその政治の方法の最終結論です。高天原の名称は五十音言霊図の上段の父韻がタカマハラナヤサと並ぶ天津太祝詞音図を語源としています。古代政治の要諦は天津菅麻の人間認識を土台とし、その上に文明創造の政庁の組織を天津太祝詞が示す如くに作れ、というのであります。

伊勢神宮の本殿の屋根の棟に鰹木（内宮は十本、外宮は九本）が棟に対して直角に並びます。そしてその棟の両端にそれぞれ二本の木が立ち上がっています（図参照）。内宮は内削ぎ、外宮は外削ぎです。これを千木と呼びます。千木は道木の意であり、道理の気とも受け取られます。鰹木は数招きの意です。両端の千木の道理の気が動きますと、その間の鰹木で示された数の根源の智性である父韻が活動して現象子音を生み出します。また千木は「契り」の意でもあります。両端の千木が父韻によって結ばれて現象子音を生みます。伊勢神宮の祭神天照大神は日本並びに世界の文明創造、即ち言霊エの神です。その精神構造の父韻の並びはタカマハラナヤサです。その活動によって生じる子音とは世界の文明の創造の事となります。



前の道理を「下津磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて」というのです。人間が生来持って生まれた天津菅麻音図を土台として、人間の最高の営みである文明創造の政治の庁の組織を制定するとき、先の序文で示されましたアイエオウの天津太祝詞音図に従った朝廷の役職の五段の順番が出来上がります。即ち、天皇（スメラミコト）ア、ひれかくる 伴男・イ、手襷掛くる 伴男・エ、鞆負ふ 伴男・オ、劔佩く 伴男・ウの五段階のことです。

「**皇御孫命との瑞の御殿へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭とかく隠りまして、安国と平けく知しめさむ。**」

皇御孫命の瑞の御殿へ奉りて、と言いますと「皇孫邇々芸命の美しい御殿に奉仕する」と解釈して当然です。しかし大祓はこの解釈は適当ではありません。形而上的・精神的な意味を言っているのです。「殿」とは、昔、言霊五十音を粘土盤の上に神代文字で刻み、それを焼いて瓦としました。「言は神なり」でありますので、明らかに神を顕わ

すの意で「あらか」と呼びました。また甕みかとも甕神みかがみ（御鏡）ともいいました。即ち五十音言霊布斗麻邇の原理のことです。言霊原理つかに仕えらるとは原理を最高の規範とし政治を行うの意であります。皇御孫命すめみまとは、ここでは単に天孫降臨した邇々芸命というのではなく、言霊原理から数えて二の二即ち三次的な芸術である社会建設を行う代々の天皇の意と取った方が適当でありましょう。

「天の御蔭、日の御蔭とかく隠りまして」の「天の御蔭」は言霊、「日の御蔭」かずたまは数霊と考えるとよく理解できます。「かく隠りまして」とは「書き繰る」の謎であります。五十音言霊は伊勢五十鈴宮にお祭りしてあります。その五十音言霊を操作する方法五十は、奈良の石上いそのかみ（五十神かみ）神宮に数霊の作用を示す「日文（一二三）ひふみ」として奉られています。祝詞の序文にありますように「天の御蔭」は「比礼挂くる伴男」の役職であり、「日の御蔭」は「手襷挂くる伴男」の役目となります。五十音言霊を整理・運用する操作の動きが数霊という事なのです。

また、次の様にも言う事が出来ましょう。天の御蔭、日の御蔭の蔭かげを影と書けば「光り」のこととなります。すると、天の光は言霊、言霊は霊でありますから、言霊の動きは「ひか霊駆り」で、霊の動き、即ち日の御蔭となります。「天の御蔭、日の御蔭とかく隠りまして」とは「言霊を数霊とを書き繰って」の意となります。

以上、大祓祝詞の第二章である「日本国肇国の目的と統治の方法」の文章の解釈は次の如くまとめる事が出来ます。

「天孫降臨以来、統治の委任を受けました邇々芸命とその子孫である代々の天津日嗣天皇は、従来の生存競争の世を支配していた人達を言霊布斗麻邇の原理を以って言向けやわし、次第に全世界と、その中心となる言霊原理を国体とする日本の国とを平和な国に建設して行ったのであります。これが人類の第一精神文明時代の始まりでありました。その統治の方法といいますのは、人間性を重んじ、人間天与の性能を示す天津菅麻音図の自覚を土台とし、その土台の上に人間の判断力の自覚であるアオウエイ五母音の柱を心中に打立て、この人間性の土台と判断力を運用することによって、更に世界統治の規範（鏡）となる天津太祝詞音図の自覚に入ること、これが天津日嗣天皇の心構え

であります。この天皇の自覚の内容を自らの心と仰ぎ、朝廷に仕える役職にある人達は言霊と数霊の法則に従って政治を行い、世界を平和に治めて行ったのでした。」

天孫降臨と呼ばれている邇々芸命集団の日本建国と全世界の「一つの言葉」としての統一の時期を約八千年前としましょう。その時から言霊布斗麻邇の原理に則る人類の第一精神文明の時代が始まりました。世界は天津日嗣天皇の高遠・厳粛な人類歴史創造の経綸の下に精神文化の花咲く素晴らしい時代が続きました。その時代は約五千年間続いたのであります。

今より三千年乃至四千年程前、人類の第一精神文明は爛熟期を迎え、人々は自らの内なる精神内の真理に根差した平和な文明の時代を謳歌すると同時に、漸く自らの外なる物質の世界の真理に関心に向けようとする新しい兆^{きざし}が見え始めたのであります。それは「生めよ、殖やせよ、地に満てよ」の地球上の人口の増加、それに伴う食糧増産、産業経済、交通の発達等が要望された結果でありましょうか。その要望に言霊ウ（五官感覚に基づく欲望）と言霊オ（現象間の関係を方式化する研究・経験知）の問題として取り上げられる事となります。人間が自らの外に向ける関心と外なる真理の探究、即ち物質科学の研究は物事を分析・破壊することから始める学問です。そして、この物質文明が急速に発育する基礎となる土壌は生存競争の社会であります。

以上の如き人類社会の精神微候を察知した大倭日高見国（日本）の朝廷では重要な会議が何回も開かれた事でしょう。その結果、朝廷に於いて人類文化創造の方針を大きく転換する決定がなされたのであります。それは人類の第一精神文明時代より物質文明時代への転換であります。その転換の方針を最も確実に実現する為の手段として、第一精神文明時代を創造した基礎原理である五十音言霊布斗麻邇の学問を人類社会の表面から隠没させ、人々の表面意識より忘却させることであります。その結果、精神の五次元性能の共生・調和は失われ、言霊ウとオのみの他の性能との協調からの逸脱・独走が始まります。それは聖書の所謂「禁断の木の実を食べた」事であり、経験知と欲望の自我意識が生まれることともなります。天孫降臨以前にそうであった如

き、地球上に弱肉強食の生存競争社会が現出するであります。そして、人類の第二の文明である物質科学はその泥沼の如き混乱の社会の中から進歩・発展して来るに違いありません。

物質科学文明創造のための方便として、精神文明の原器である言霊原理を一定期間社会から忘却させるという朝廷の決定は、一種の「賭」であったであります。その事によって人類はどれ程の困難に遭遇するか計り知りません。しかし、この決定は単なる賭ではありません。

「人の心とは何か」を熟知し、「神ともなり獣ともなる」人間の業を知り尽くしている霊知りの集団が決断した「人類の第二の物質科学文明を最短期間に完成させる」ための最良の方法であったのです。

言霊原理の社会からの隠没を近い将来に実行する事が決定した頃、日本朝廷に於いて、先ず大祓祝詞の作成が行われたのであります。鵜草葺不合王朝三十八代、天津太祝詞子天皇の時と伝えられます。次に精神文明の成果の日本より外国への輸出が抑制され、終に中止されました。今から三千年程以前の事と推定されます。この政策が実行されるに従って、予想された如く世界人類の中に種々の悪徳による罪穢が醸成されて来ました。人類はその第二の物質科学文明の時代に突入して行ったのであります。大祓祝詞の文章は、その発生した来た人類の罪の内容の説明である第三章に入ります。